

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）

分担研究報告書

ベーチェット病の皮膚粘膜病変の解析

分担研究者 埼玉医科大学病院 皮膚科 中村晃一郎

協力研究者 東北医科薬科大学 皮膚科 川上 民裕

総合南東北病院 皮膚免疫アレルギー疾患研究所 金子史男

研究要旨 ベーチェット病の皮膚粘膜病変は口腔アフタ性潰瘍、外陰部潰瘍、結節性紅斑、毛嚢炎様皮疹、血栓性静脈炎である。これらの特徴的な症状は初発症状として生じ、長期間にわたり再発を繰り返す。これまで皮膚粘膜症状の診療ガイドラインを提唱してきた。これらの既存治療、将来的な治療に対して、国内外の文献的な検証をおこなった。

A. 研究目的

ベーチェット病の皮膚粘膜病変は口腔アフタ性潰瘍、外陰部潰瘍、結節性紅斑、毛嚢炎様えん皮疹、血栓性静脈炎である。これらの特徴的な症状は初発症状として生じ、同時に長期間にわたり再発を繰り返す。皮膚粘膜症状の治療をこれまでガイドラインで提唱してきた。（ベーチェット病診療ガイドライン 2020、ベーチェット病皮膚粘膜病変診療ガイドライン）。これらの既存治療、将来的な治療に対して、国内外の文献的な検証をおこない今後の新たな治療について検討をおこなう。

B. 研究方法

国内、海外の皮膚粘膜病変の治療に関する総説について検討し、評価をおこなう。

（倫理面への配慮）

本研究はヘルシンキ宣言(2013年総会で改訂)の精神にもとづいて実施する。

C. 研究結果

ベーチェット病の皮膚病変のなかで、結節性紅斑は比較的小型の紅斑で、短期間に消退する症状で、組織学的に隔壁性脂肪織炎であるが、ときに小血管の血栓形成を認める。毛嚢炎様皮疹は紅斑、膿疱を生じるが、組織学的に血管周囲の炎症が顕著である。治療として海外では EULAR 推奨で急性期にステロイド外用療法、コルヒチン、ステロイド全身投与が選択されている。本邦のガイドラインでも、ステロイド局所療法、コルヒチンによる全身療法が選択される。

D 考察

ベーチェット病の結節性紅斑や毛嚢炎様皮疹の所見は、組織学的に好中球浸潤が顕著であると同時に、variable vessel vasculitis の炎症所見を認める。また皮膚病変で真皮から脂肪組織内の小動脈、静脈に血栓形成が認められることがある。治療として炎症反応を抑制する、ステロイド外

用薬による局所療法や、好中球の活性化に対するコルヒチン全身療法が選択される。今後既存治療、新規治療薬に対する検証が必要である。

G. 結論

皮膚病変として特徴的な結節性紅斑、毛嚢炎様皮疹は真皮から脂肪組織内までの大小の血管に好中球性血管炎を生じ、ときに静脈血栓形成を生じる。コルヒチンをはじめとする既存治療薬の有効性の検討がさらに必要である。

H. 研究発表

1) 国内

口頭発表 1 件
原著論文による発表 1 件
それ以外（レビュー等）の発表 0 件

1. 論文発表

川上民裕。アフタ性口腔粘膜疾患のすべて Monthly Book Derma 304; 9-14, 2021

2. 学会発表

1. 中村晃一郎。2020年6月5日。ベーチェット病のあらたな治療。第119回日本皮膚科学会総会。

2) 海外

口頭発表 0 件
原著論文による発表 1 件
それ以外（レビュー等）の発表 0 件

1.論文発表

原著論文

Nakamura K, Tsunemi Y, Kaneko F, Alpsyoy E. Mucocutaneous manifestations of Behçet's disease. Frontiers in Medicine. Feb 2021 <https://doi.org/10.3389/fmed.2020.613432>

著書・総説 なし

2. 学会発表 なし

G. 知的財産権の出願、登録状況
なし

1. 特許取得
なし

2. 実用新案登録
なし

3. その他
なし